

現役高校生専門予備校

Veritasーヴ ェリタス

〒460-0008

名古屋市中区栄2-8-5

土井ビル5F

TEL. (052)-222-3886

FAX. (052)-222-3887

平日：13時～23時

土日：10時～23時

mail : veritas.nagoya@gmail.com

blog : <http://veritasnagoya.blog.shinobi.jp/>

★ 地下鉄鶴舞線・東山線 伏見駅から徒歩5分

★ 「伏見モンブランホテル」の斜向かい

【はじめに】

はじめまして。パンフレットを読んでいただいております。

このパンフレットは私たちの宣伝であるだけでなく、学習・学習方法・受験に向けての準備などに少しでも役に立つことがあれば、と思って書いています。

1, 2年生のときに基礎をつくることが大切だ良くいわれます。確かにそうです。けれど、それは学力にとどまるものではありません。個別指導を中心に生徒と目標に向けて格闘していると、いわゆる学力と同程度に、場合によってはそれ以上に大切なものがあることを痛感します。これは学力とは何だろうか、ということにもつながります。

ここでまちがうと、いくら学習量を積み重ねても学力につながっていかないこともあります。

受験に向けて、目標に向けて学力が不足しているなら当然それを獲得していかななくてはなりません。そのためには「量」は確かに必要です。それは真理です。けれど量的増大がそのままストレートに「学力」につながるかどうか？そこにはいくつかの条件が必要なのです。ましてや「志望校」と勝負を挑むなら、そのための条件が1, 2年生のあいだにつくられてないと非常に苦しくなります。

具体的には紙面の許すかぎり、以下で述べたいと思っています。

とくに勉強しているわりにいまひとつ成果が現れないと感じている生徒、いまはまだ勉強をあまりしていないけれど、かなり高いところ、ギャップの大きいところに志望校を設定しているひと、定期試験と模試や実力試験の差が大きいなぁと思っている人、そういう人はぜひ読んでみてください。

現役高校生専門予備校 Veritas
教室長 高木敏行

【自分の学習方法などをちょっと考えてみましょう】

次にあげることは、私たちが指導の中でときおり（いやひんぱんに、というべきか）感じることです。ちょっと細かいですが思いあたることがありますか？

★問題を解くのはなぜだろう？ あるいはその問題を解くことで何を獲得するのか意識していますか？

★手が止まりがちになっていませんか？

例えば解説を読むとき、読みながら計算をキチンとしていますか？ あるいは、解答が分からないとき、式変形をただにらむだけで「わからないな」と言っていないですか？

★問題を解いていて詰まったりしたとき、あるいは見直しの時、何度も問題を読み直しますか？ 問題を本当にキチンと読んでいますか？

★解答・解説はちゃんと全部読んでいますか？ 自分が正解していたらそのまま通り過ぎてはいませんか？ざっと見るだけで終わっていませんか？

★計算しているとき、何を求めているのか分からなくなったりしたことはありませんか？ 答えをみて「あれ？ y を求めるんだっけ？ x じゃなかったんだ」などと思ったことはありませんか？

★分からなかった問題の解答をみて、それをノートに写して何となく満足していませんか？

★きれいなノートをつくることで何か満足感を得ていませんか？

★ミスで答えが違った場合を、「できた問題」に分類していませんか？

★図形・グラフをこまめに描いていますか？また、キチンと描いていますか？

例えば三角形 ABC に円 O が内接する、という問題のとき、三角形を描いて、中心も定めずいきなり円を描いていませんか？

★式と図形・グラフをバラバラに捉えていませんか？例えば

(1) $x^2 + y^2 = 1$ (x^2 は x の 2 乗のことです)

(2) $\cos \theta$ の 2 乗と $\sin \theta$ の 2 乗の和が 1

(3) 原点を中心にした半径 1 の円。

この 3 つが同じものだと思われていますか？

★英語では 5 文型はなぜ必要だと思いますか？

★使っている「定義」を説明できますか？ 何となくになっていませんか？ 公式の導出をやっていますか？ 全部覚えていなくても良いですが、自分で導いたりしていますか？

★「定義」から考えたりはしますか？

★現代文で主語・述語・目的語、原因と結果・根拠と主張などを意識的に読んでいますか？

★国語の選択問題で、どうしてこの選択肢になるのか考えていますか？その理由は本文の中にありますか？

★国語の選択問題で、正解だったら解説をみないで終わったりしてませんか？

★いままで勉強してきた単元、そのおおざっぱな内容は頭の中に描けますか？そのつながりはイメージできますか？

★計算をすればできるのに、めんどくさくなって途中でやめて解答見たりしていませんか？

★英語で5文型って別にいらなと思ってないですか？

★I am a student. の「I =私」に、訳するときはどうして「私は」と「は」がつくのですか？

★文法はあまりわからないけれど、単語さえ知っていれば訳せると思っていないですか？

★定期試験と模試や実力試験の結果が大きく違ったりしないですか？

★英語の構造をキチンと捉えるよりも単語の訳を並べて、上手くつながるようにして和訳をつくっていませんか？

★志望校の合格に何が必要なのか、自分なりに明確になっていますか？

いかがでしたか？

数学や英語、国語といったカテゴリーをバラバラにしてあえてランダムに並べてみました。あれ？これって私と同じかな？と思うようなものはありませんでしたか？

いくつ該当したらどうで、いくつだったらこうだ、などと言うつもりはありません。

ただやはり多く該当すればするほど、その学習方法に欠陥があるといわざるをえないと思います。

勉強は量も必要です。けれども量だけでは解決しないこともあります。物事には量と質という2つの側面は必ずあります。一方だけでは結果は生み出されないのです。

もう一つ考えてみてください。今度はどうでしょう。

- (1) 問題をみてわからなかったら解答を写して終わる。やり直しはしない。
- (2) 分からなかった問題はいちおう、やり直す。
- (3) とくに間違えた問題については公式と解法をしっかりと覚え込む。
- (4) 解いたら答えがあっていたらそれで終わる。
- (5) 解いたあと、一応、解答をざっとみる。
- (6) 解答・解説は全部見る。
- (7) 【研究】とか【発展】とか書いてあると、むしろ気になって見てしまう。分からないとあれこれ考えたり、調べたりし始める。
- (8) 逆に「研究」「発展」などに目を通すのは学習効率からいって時間の無駄だからあまりみない。
- (9) 自分が証明をしたことがない「公式」や「定理」を使うとき、どうしても気持ちが悪い。
- (10) 証明はしなくても、「公式」や「定理」は使えさえしたらかまわない。
- (11) 別解やもっと簡単な方法、もっとエレガントな方法がないか、気になる。あるいは何か

べつの方法がありそうだな、と思ったらトライしてみたいくなる。

(12) 鮮やかな解答を見ると見とれてため息がでる。

(13) できたと思って間違っていると原因を突き止めないと気がすまない。

どうでしょうか？ 君の勉強のスタイル？ 感覚？ それはどれに近いでしょうか？

いま、いろいろな項目を並べました。その一つひとつについて述べることはできません。しかしこれらは、受験へむけ、受験を突き抜けて本当の学力をつけていく上で大切なことを含んでいるのです。

自分の勉強の仕方は意外に見えにくいものです。使っている参考書や問題集はわかります。でも、それがどういうレベルのものなのか、例えば問題集の中のA問題がどのレベルで、B問題はどうか？ 発展などと書かれているもの？ わかりますか？ 入試を基準にして、どのレベルのものがいわゆる<センターレベル>なのか、どれが国公立2次の標準なのか、どのくらいになると<やや難>といわれるようになるのか…… そういうこともなかなかわかりません。

くわえて自分の勉強の中身、質、あるいはその感覚のようなものがどういう位置にあるのか、どういうレベルにあるのか。最初から把握している生徒はほとんどいません。<勉強する>ということがどういうことなのか。それも同じではありません。いやむしろ、ここですでにひとり一人の生徒によって大きな隔たりがあるのです。

じっくり考えてみるべきテーマです。

本格的な受験体制にはいると猛然と走り始めることになります。猛然と走り始めて、結果を見て、あれ？と思う前に、いま、しっかりと考えることはとても大切なのです。

【思考すること 思考が躍動すること】

本格的な受験体制に入るのは人それぞれかなり時期が異なります。

けれども、「本格的な受験体制」の以前が受験に無関係だと言うことはありません。当然です。では何をしておくべきなのだろうか？

基礎的な学力の構築は必要です。いうまでもないことです。

しかし個別指導でひとり一人の生徒の思考の内部に分け入り、課題を探り、解決の糸口を探し続けていると通常基礎学力といわれているものとは少し違う必要なものがあることに気づかされます。とくに1年生、2年生のあいだに磨きをかけておきたいことがあるのです。

一言でいえば「思考の躍動感」とでも言うべきものを獲得したい。その感覚を捉えておきたい、たくさん味わっておきたいのです。それは物事を捉えた、と自分が判断する基準、理解した、分かったという基準そのものを押し上げていくのです。そうした感覚に裏打ちされた学習量のアップは爆発的な学力の向上をもたらすことができます。

なぜこれが大切だというのか。

例えば同じ問題集を同じ時間かけて勉強したとします。しかしそのことによって身につける学力には歴然と差があります。同じ労力を投入しても全く、と言っていいほど異なった結果が出てきます。

原因は何だろう？

一つにはそれまでの学習の蓄積があります。蓄積＝土台が弱いところでの学習はやはりなかなか効果が出てきません。それは確かにあります。蓄積だけの問題であればその不足分を補うだけの学習量をこなせばいいですよね？ それは絶対必要です。当然すぎることです。

けれどもどうやらそれだけの問題ではないのです。

例えば、どうしていままで学習してきたことの身につき方が違うのだろうか？

どうしてはじめての単元、はじめての教科でも最初から差がつき始めるのだろうか？

学習量を増やすのはいわば「生徒の責任」です。私たちは「もっとやれ」と言うことはできません、やるのは生徒の君たち自身です。けれど、こうした問題は生徒がひとりで考えてもなかなか答えが出てこないことだと思います。自分の課題を客観的に捉えきるためには、捉えるための物差しが必要です。けれどそれをひとり一人の生徒がもっているわけではないからです。また、その課題は思考のプロセスの内部にあります。外側からなかなかわかりにくいのです。だから講師と生徒が一緒になって課題を探り、根っこを突き止め、そこを変えて行かなくてははいけないのです。だから私たちはクラス授業をやりながらも個別指導にこ

だわるのです。

受験の文脈で言えば、どのくらいの＜思考の躍動感＞をもっているかで、ここから先の学力の伸びがある程度決まってしまうのです。

例えば東大を志望する。京大を志望する。医学部を志望する。まだ本格的な受験体制に入っていない。だからまだ学力は足りない。けれど時期がきて勉強をやり始めたら何とかなる。何とかなるだろう。そう思っていたりしますよね？

確かにそうです。未来のことはまだ誰にもわからない。その時の学力で未来の学力は判断できない。けれども特に個別で教えていると、この生徒はしっかりやれば東大・京大クラスだな、名大レベルにとどまる器ではないな、と思うことがあります。逆にいまの学力からすれば十分に難関校をめざすことができるはずなのに、苦しいな、と感じることもあります。その時私たちが感じとっているものが、少なくともその一つがこの＜躍動感＞とでもいうべきものなのです。

べつの言い方をすれば、誰が何といおうと、自分が東大に行く、京大に行く、医学部に行くと思うのであれば、挑戦すればいいと思います。するべきだと思います。しかし、そうであればいま、この時点で、その志望校に届く＜思考の躍動性＞を獲得して行かなくてははいけないのです。いわばあらかじめその志望校のレベルに、自分の思考のプロセス、そのクオリティが届いていなくてははいけない。それがなければこれから築き上げていく＜基礎学力＞が、その志望校の壁を突破するのにたえられるレベル・クオリティにならないのです。

では、この思考の躍動感というのは何だろう？

言葉で説明するのは難しい。何といえいいだろう？

例えばそれは、分からなかったことがスッと理解できたときの感覚に近いものです。「分かった！」と思う。それまで何か思考の中でモヤモヤしていたものが、ある瞬間、ぱーっとクリアになる。分かるときは、本当に「瞬間的」です。そしてある時から同じものがいままでとは全然違う感覚で見えてくる。

それはまた未知なものに触れたときの驚きであり、抽象的なものの具体的な姿がぱっと見えたときでもあり、具体的なものの背後に本質的なことがふわっと浮かび上がってきたときでもあります。そのとき、いままでよそよそしかった抽象的なものが急に生きたものになり、バラバラだった具体的なものが統一され、関連づけられ捉えられはじめる。そうした感覚です。

あるいは既知のもの、すでに何度もみて、触れていたものの中に、そのとき、はじめて見つけたように新しい何ものかを見いだしたときの新鮮さのようなものです。突然、いままで目にしていた世界が、その色彩がかわるのです。

こうしたことは誰もが経験していることだと思います。日々の学習の中でも、学校の授業

の中でも味わうことがあると思います。

その感覚を、思考が探し求め、つねに意識が外部に向かって開いているような状態になれば良いなと思います。

モヤモヤがまだ少しだけ残っている状態で「だいたいわかった」と言ってしまうとはく躍動は生まれません。「問題のやり方がわかれば、まあいいか」と思っていたら躍動する瞬間はやってきません。いつも「これは試験にはあんまりでないな」「受験にはでないな」と思っていたらいけない。そう判断を下し続けることで、実は思考と外部との関係を狭くし、やせ細らせ、そして思考そのものを停滞させるからです。

モヤモヤしていたら、ちょっとだけガマンしないといけない。本当にすっきりとして視界が変わってしまうくらいまで試行錯誤してみればいい。問題が解けても（それは大切だけれど）満足しない。問題を解いて、その問題の根っこにあるものをしっかりつかみたい。どの教科も、その内容はバラバラではないですよね？ いろんな糸が縦横に張り巡らされており、いろんなことが思わぬところにつながっていたりする。「受験に関係ない」と切った、そのところがミッシングリングになりつながるべきものがバラバラになるかも知れない。

ある人から聞いた話です。

例えば余弦定理。一般的に2つの式の形があります。 a の2乗が一方にあるようなものと、 $\cos \theta$ があるようなもの。この式の形をみていたとき、ふと、あ、三角形の合同条件に対応した形になってるんだ、と思ったそうです。それは一種の驚きでした。前者は2辺とその間の角が決まり、対辺の長さがきまる。後者は3辺が決まると3角形が決まり、角度も決まる。そういう形になっていますね？

非常に新鮮だったようです。3角形の合同条件という中学校で習うようなことが、全然ベクトルの姿で見えてきた瞬間。そこからいろいろなことがひろがります。「ということは、合同条件で示される内容で、3角形が決まるわけだから、その3角形にまつわるいろんなことが全部記述できるのかな？」と。「だったら面積は？ 外接円や内接円の半径は？」といろいろ導出してみたりする。

そうすると今度はベクトルの見え方が変わってきます。

例えば平面は3点で決まります。あるいは1点と1直線で決まります。他にもいろいろな決定の条件がありますが、それに応じたベクトルの式の立て方がやはりあるのですね。

これは一例です。こういう瞬間をへて獲得された認識・理解はどんどんひろがっていきます。さまざまなすでに知り尽くしているかのように思っていたことが、新しい光が当てられ、蘇り、また別のものを照らし出したりするのです。蓄積された知識は、積み上げられているだけでは役に立ちません。またいずれ忘れ去られます。けれど、こういう知識はつねに新しく生き物のようにあちらこちらを動き回る、動的な知識なのです。だから忘れられることもない。見たこともないような問題に出くわしたとき力を発揮するのはこういうような知識・蓄積なのです。

私たちはこういう＜瞬間＞が何にも代え難く大切だと思います。そして指導においてそれを実現したいと思います。そしてそれは講師から生徒へ「あたえる」ということができるものではないのです。

学習の主体は生徒です。生徒ひとり一人です。講師や教室ができることは非常に限定されています。しかし私たちは、ひとり一人の生徒向き合い、生徒と力をあわせて思考のプロセスに分け入り、課題を探り、生き生きとした思考とそれに立脚した学力を構築していきたいと願っているのです。

【思考の躍動する力の獲得のために何が必要なのか？】

これは日々直面している課題です。一つの正解があるわけではありません。課題は生徒ひとり一人によっても違います。同じ80点の生徒のできるところ、できないところが違うように課題が違うのです。

しかしある程度まで一般的にいえるだろうと思うこともあります。

思考の躍動性は、未知なものに触れたとき、既知のもののなかにいままで気がつかなかった関連を見いだしたとき、驚き飛躍することだとしておきましょう。

未知なものに触れるというのは、実はそう簡単なことではありません。未知なものはたくさんあります。目にすること、耳にすること、教えられることもたくさんあると思います。毎日まいにち、未知なものは目の前にあります。

けれど、それに「触れる」ことができないのです。あるいはそれを「捉える」ことがなかなかできないのです。知らないあいだにどこかに通り過ぎていってしまうのです。思考が、感覚が外部に向けて開かれていなければ、未知なものは飛び込んできてくれないのです。同じように知らないところに旅行に行ったとして、強い印象をいくつも自分に刻み込んで帰ってくる人もいれば、通り過ぎるようにして帰ってくる人もいます。そういううちがいたと思ってくれたら良いと思います。

すでに見知っているもの、既知のものについても同じです。

例えばニュートンは「万有引力を発見した」と良く言われます。その中身を議論しはじめるととんでもないことになるのでやめておきますが、いちおう、そのように言われています。

けれど、引力による現象は、それこそ数限りない人々が数限りなく目にしてきたことです。私は子どものころ階段から落ちたことがあります。いわば「万有引力を身をもって感じとった」わけです。けれどそれを誰も「発見」しなかった。これは少し大げさに聞こえるたとしても知れないけれど、本質的なそういうことなのです。すでによく知っているもの、事柄の中にひそんでいることにある時はと気がつくのです。発見するのです。

こうしたことが難しい。こうしたことができれば思考は生き生きと活発に動き始める。また生き生きと動いている思考がそうしたものを捉える。

これでは堂々巡りですね。

ではどうすればいいのか？

既知の中に未知のものを見いだす。それは具体的なもののの中に抽象的で一般的なものを捉えることであり、現象的な事柄の中に本質的なことを見いだすことだと思います。抽象的

なもの、本質的なものを発見すると、いままで全然別のものだと思っていたものとの関連が浮かび上がってきたりするのです。

そういうとらえ方をするためのカギだと思うことがいくつかあります。

非常にシンプルなやり方だけれども、まずは「手を動かす」こと。

論理的であること。

言葉にたいして繊細であること。

これらは絶対に必要だと思っています。

これらは思考が抽象的で本質的なことと具体的で現象的なこととのあいだを自由に行ったり来たりするために必要なことだと思うのです。

手を動かすことは、本当に大切なことだと思つづく思います。

思考を活発に動かすために頭の中を動かそうと思ってもなかなかできない。手を突っ込んでむりやり脳を動かすことができたなら簡単なのかも知れないけれど、そうはいきません。残念ながら。

けれども、それに近いような効果が「手を動かすこと」にはあると思うのです。

よく数学や理科などで手で計算を実際にやりなさい、あるいは何かを暗記しようとするときなどで、「手をもっと動かしなさい」といわれたことはありませんか？ 書いて覚えなさいといわれたことはありませんか？確かに覚えるために手を動かすことは大切です。目だけではなく、手も動かす、あるいは口にも出す。五感を総動員することで脳は活性化します。そのような実験結果もあります。

しかし私は、物事を理解するときにも、またく思考する>ためにも非常に有効だと思えます。

手を動かす。文字を書き、単語を書き、図やグラフを描く。

<思考>の世界は抽象的です。具体的な何かが脳の中に存在するわけではありません。だからそのプロセスはなかなか自分ではつかみにくい。それを書くこと・描くことで目の前に引っ張り出してやるのです。これはたぶん、思っているよりも遥かに大きな力があります。思考のもつれをなおすには、まずく手を動かすこと>です。どんどん動かしてください。図形やグラフも、何度も描き直してください。そのうちにふと浮かんでくるものがあります。右脳が刺激される、などという理屈もあるのかもしれませんが。そうではないのかもしれない。なぜなのかはわかりません。でもそれは確かにあるのです。

図形やグラフは、いわば直感的な世界です。数式の展開などは論理の世界です。それらが両方そろってはじめて思考力が解放されるのではないかと思うことがあります。抽象的な論理の世界が、具体的な視覚的・直感的な世界となって登場することで、物事が立体的に捉えられるのではないか、と思うのです。

少し違う例ですが、作家や詩人とよばれる人たちは、言葉によって作品をつくっていますが、逆に言葉によって作品をつくらされている、という感覚を少なからず持っています。どうしたことかということ、普通の感覚では、自分が考えて、それを言葉にし、文章や詩にする。そう思いますよね？

けれども彼らや彼女らの中には少し違う感覚がある。どこからか言葉がやってきて、ぼつんと紙の上に登場する。そしてその登場した言葉が別の言葉をよんできて、文になってくる。そうやって言葉が言葉をよび、一つの作品が生まれてくる。そういう感覚です。

私はそういう作用が、日々の学習で手を動かしていることの中でもおこっているのではないかなと思うのです。

だからどんどん手を動かしましょう。図形やグラフならいろんなパターンのものを描いてみましょう。あるグラフを描いた瞬間に、それまで見えなかったものが見えることがあります。

もう一つ、非常に大切だと思うのは「言葉」です。

具体的なものの本質を捉えるとき、言葉がそれを仲立ちしています。これはとても大切なことなのです。根本的には国語力はすべての教科の根本を支えています。さまざまな教科の基本的な定義も言葉による説明抜きには成り立ちません。基本的な概念なしに科学はなりたちません。だからある言葉の意味がパッとわかったとき一挙に理解が進むことがよくあります。

言葉にはそうした力があります。

論理は基本的に正確な言葉の上に成り立っています。正確な言葉とは、まずは言葉のルールにきちんと則っていないくはなりません。何が、何にたいして、どうしたのか。そうした基本的なことを曖昧にして読んでいることが非常に多いと感じます。国語が苦手な生徒の多くは、例えば「楽しい音楽を聴いた」「楽しく音楽を聴いた」「音楽を聴いて楽しんだ」というようなものをごちゃ混ぜにして「だいたいみんな同じ」としてしまふのです。ひとつ一つ違います。その違いに繊細になって欲しいのです。

入試の評論文などを読んでみると、言語論によくぶつかります。「人間は言葉によって世界をとらえ、言葉によって思考する」というような趣旨の文章がひんばんに出てきます。人間が言葉によって世界をとらえるのならば、異なる言葉（例えば先の例）を「だいたい一緒」としてしまふとき、曖昧に世界を捉えることになりませんか？

あまりにも身近すぎる日本語の落とし穴なのだろうと思います。先の例も、英訳しなさいといわれるとおのおの全く違う英文になりますね？述語動詞が違うし、修飾関係も全く違います。「だいたい一緒」という訳にはなりません。かえって英語の時の方が繊細に言葉に向かっているような気がしてならないときがあります。しかしそれではいけないのです。

言葉で物事を捉えるのならば、その言葉を大切に、そして繊細に扱ってほしいのです。そのときにはじめて捉えることができるものがあるからです。

ただ留意したいのは、日常的な言葉と学問用というか、学習用というか、非日常的な言葉とのちがいです。ここでその違いを述べることはしませんが、日常的な言葉ではなくて、勉強するときに使っているいわば非日常的な言葉。これを大切にしてください。論理的な思考は、その上に乗っているのですから。

そして自分の思考を壊すこと

見知ったものの中に、新たな発見をすること。未知のものに思考が反応し、活発に動き始めること。これがなかなかできないことの理由のひとつに思考の保守性のようなものがあると感じます。

どのような時に躍動するような思考が生まれるのか。

ひとつはその瞬間の＜驚き＞にあるように思います。いってみれば何かに触れたとき、「ふーん」と思うのか「へー！」と思うのかのちがいです。

思考が躍動するとき、何かがポンと弾けるような感覚があります。私はその時、文字通り古い思考、そのスタイルや枠組みがはじけ飛んでいるのだと思います。ある意味で思考の枠組みが壊されているのです。

ガストン・バシュラールという哲学者がいます。科学哲学や詩学の本を書いていました。彼が提示した概念に「認識論的切断」というものがある。科学の進歩の大きな節目ではこれがあったというのです。

バシュラールは、無知とは空っぽを意味するのではなく、そこには偏見と誤解の強固な織物で埋め尽くされているというような趣旨のことを述べています。そして新しい科学的な発見や認識が生まれるためには、この偏見や誤解を「切断する」ことが必要だというのです。

これは学習することそのものにもいえることだと思います。

私は、もともと何かを学ぶということの中に、これまでの自分の観念や思考のクセなどを壊して、新しくするということが含まれていると思っています。学習するということは、いままで学んだことの上に新しいことを積み上げることではなく、あるいは積み上げるだけではなく、これまで学んだことを時には壊しながら、新しく捉え直していくのではないのでしょうか。私はその「切断」の激しさが＜躍動的な思考＞の正体のように思えるのです。そういう思考をいつもすることはなかなか難しい。けれど求めることはできるのではないかと、思うのです。

【Veritas の特徴】

ここまで述べてきたようなことを、ではどう実現しようとしているのか。簡単に述べておきます。

基本的性格

私たちの教室は予備校と銘打っています。まず第一に受験を軸に教室をつくっています。そしてその一環として定期テスト対策も捉えています。

受験にむけても基礎力を重視いたします。その基礎力は英語や数学などの各教科固有の基礎にとどまらず、思考すること、物事のとらえ方をも含みます。

基本的な立場として

- (1) 生徒の可能性を信じるところから指導をはじめます。
- (2) 学力とは、生きる力の一環だと考えます。
- (3) 生徒の思考の内部にわけいり、一緒に＜思考すること＞をあじわい、その力をつけていくことをめざします。
- (4) 予備校であるかぎり、結果にこだわります。生徒がギャップの大きな目標を設定してくるとき、生徒の可能性をみずに目標を下げさせるのではなく、あくまで生徒自身の目標にこだわっての学習を進めていきます。だから時に厳しい指導もあります。

指導形態

完全 1 対 1 の個別指導を軸に、最大 10 名の少人数制クラス授業や質問自由な自習などを組み合わせています。

学習内容やプランはひとり一人全く違います。完全にハンドメイドで作り上げていきます。

指導体制

冒頭から述べてきたことを実現するためには、しっかりした指導体制が必要になります。Veritas では、すべての個別指導の内容が教室長、主任に報告され、それに対して毎回指導と方針が示されます。個別指導のほとんどは直接、教室長の目の届くところで行っております。ですから教室長と主任によって生徒はすべて把握されている状態にあります。そのため大人数の教室にはなりません。

この仕組みによって個別指導のすべての経験は、教室の経験としてまとめ上げられ、その経験と格闘が個々の個別指導とその内容にフィードバックされていきます。生徒任せでも、講師任せでもない指導体制です。このことによって始めて、教室全体が生徒とともに呼吸

し、前進していくことが可能になります。

またこの担当講師と教室長、主任とのやりとりの記録はすべて個別ファイルに記録され、定期的にご家庭に送られます。生々しい指導の状況を何の脚色もなくダイレクトにお伝えしております。

個別指導について

Veritas の個別指導について若干付言いたします。

通常、個別指導を銘打っている教室・塾は多くの場合 1 対 2，あるいは 1 対 3 である場合が多いようですが、本当に一人の生徒を内側からつかみ取ろうとすると、やはり完全 1 対 1 でしかできないことがたくさんあります。ですから Veritas では 1 対 2 や 1 対 3 は採用しておりません。

また大手予備校では、講師や教室の責任者がひとり一人の生徒を把握してはおりません。これは当然です。では一般的な個別指導スタイルのところでは把握されているかといえば、実はそうでもないのです。

一般的に個別指導形式の多くの塾は、学生講師が直接の指導を行っています。それは Veritas でも変わりません。部分的に社会人講師や専任講師が担当することもあります、基本は学生講師です。

しかし少し違う点があります。通常の場合、指導内容などは担当の学生講師にほぼ一任されているのが現状です。ひとり一人の学生講師はどこでも一所懸命、指導をしていると思いますが、どうしても経験値が不足します。また自分一人の目で生徒を捉えるため掘り下げることができなったり、間違った把握をしているケースも生まれてきます。

同時に優れた指導力を発揮する講師がいたとしても、その経験やノウハウが教室に組織的に蓄積され他の生徒の指導にいかされるということもほとんどありません。つまりは生徒ひとり一人は、教室によってあまり把握されていないのです。

しかし当 Veritas では、指導履歴のレポートをごらんになる機会があればよくお分かりいただけますと思いますが、担当講師一任はありません。指導と指導内容についての責任は教室長が追っております。そのことによって講師ひとり一人のスキルの向上も果たしてきたと自負しております。またひとつ一つの個別指導が、経験として組織的に教室に蓄積され、そこから次の指導内容とスタイルが生み出されてきております。この文章全体がこれまでの指導の中から生まれてきたものなのです。教室全体が生徒と呼吸している。そういう教室だと考えていただければ良いかと思えます。

大学受験英語～Veritas での指導について

— 講師・滝野瀬 昌樹

なぜ大学受験の英語ができない？

日本の英語教育に問題があると考えている人は多いはずです。「細々した文法ばかりやっている」「中高6年間もやっていてしゃべれるようにならない」「教科書を読んで先生が訳を言うだけ」「大学入試が難しすぎる」といった意見がよく聞かれます。たしかに、こういった意見は正しいと思います。ただ、私の個人的な見解は少し違っています。受験生の大半は、結局のところ半端な力しかないのです。大学入試程度の文章が読めない、英作文が書けないのは、勉強の仕方が甘いということなのです。

対応できる力をつけるにはどうしたらよいのか？

何はともあれ、語い力の問題があります。英語ができない第一の理由は語い力不足です。単語を知らなければ英文は読めない。これは当たり前のことです。ですが、残念ながら、本気で取り組む生徒がほとんどいないのが実情です。単語を知らないと、書かれている内容が分からなくて英語は苦痛になります。それで嫌いになってしまう。英語を見ると逃げたくなってしまう。

読めると楽しい

私自身、高校に入って間もない頃は大変でした。とにかく知らない単語が多い。でも、早い時期に気付きました。「単語をやらなければ先には進めない」。高校1年の秋に英検2級を取るという目標を掲げ、問題集を買い込み、文章を読みながら知らない単語をすべてノートにま

とめ憶えました。めちゃくちゃな方法ですが、これが良かったのです。ノートに書く単語は多いときで1日に100個ほどになりましたが、毎日毎日、そのノートを開いて確認しました。当然のことながら、1日に確認する単語数はどんどん増えていきましたが、それと平行して、文章も読めるようになっていきました。読めると英語は楽しくなるものです。

一度、本気で単語をやってみないか

高校生は本気で単語を憶えようとしません。だから、所詮その程度の英語力しかつかないのです。文章が読める楽しさも味わえていないのです。

また、読む、というのはとにかく経験がものをいいます。1つ1つの文章をしっかり理解することを繰り返すにつれ、次のものがますます楽に読めるようになります。単語を憶えるだけでなく、たくさん読むことです。こういった積み重ねの重要さは言い尽くせません。

しかし、問題はこれだけではないのです…

論理、言葉のあや、そして教養に問題が

Logic（論理）とは「話の筋が通っていること」をいいます。具体的に言います。風邪を引いた、だから。空欄には例えば、“学校を休んだ”などを入れられますね。でも、“遊びに行った”はおかしいと感じます。因果関係(cause & effect)の論理です。Aは真っ黒だ。それに対しBは。ときたら、やはり“真っ白”が入りますね。今度は対比(contrast)の論理です。

こんなのはどうですか？ 音：静寂＝光：。答えは“暗闇”です。音のない状態が静寂、という関係から、光のない状態は…と考えたわけです。これを類推(analogy)の論理といいます。

他にも、分類(category)、逆説(paradox)、皮肉(irony)、idea と example といった代表的な

論理が英語には存在します。難しいものには見えませんか？ ですが、こういったものを苦手としている生徒が非常に多いのです。論理を把握して、あるいは上手く利用して、文章の内容を捉え設問に解答することができないのです。

言葉のあや、に対するカンが鈍い生徒も多いです。

物事には2つの言い方があります。「文字通り」と「比喩的」です。言葉のあやは後者の同義語です。例えば、「りんごの種」は文字通り；「不安の種」は比喩的。「殻が割れそう」は文字通り；「頭が割れそうに痛い」は比喩的。「朝飯前の散歩」は文字通り；「朝飯前の試験」は比喩的。

これと同じことが英語の文章中でも頻繁に起こりますが、文字通りの、そのままの意味から抜け出して、応用的・派生的な意味を捉える感性が養われていないケースが多々見受けられます。

近年の入試英語長文で題材にされるテーマは非常に多彩です。教育問題・民主主義・日米文化比較・ネット犯罪・血液型性格診断・作家の伝記・古代文明遺跡の調査・嘘と脳波の関係・知覚認識論などなど。

ただ、高校生は、そういったテーマを英語で読んでしみじみと理解することがなかなかできません。抽象的で読み手の思考力を必要とするものになればなるほどです。英語だから…、という問題ではありません。そういったテーマを十分に理解できるだけの背景知識、言い換えれば教養が不足していると考えられるのです。英語を勉強すればするほど、どれだけ読めるか、という問題は最終的にこの教養の程度に行き着くのです。

現実的な授業スタイル

まず、「単語・文法・和訳」の3つを徹底してやります。これが英語の基礎力です。長文読解は？ 英作は？ と飛びつかないで下さい。この3つがしっかりせずして、読解も何もありませんから。

単語の重要性はすでに述べた通りですが、具体的には、①ノートを作り、知らない単語をそれにまとめていく ②単語集で憶えていく という2つの方法を平行してやるよう指示します。②に関しては、授業でテスト形式で継続的にチェックします。言葉は悪いですが、半ば強制的にやらせます。

文法はやはり重要です。文法が必要な理由は、四択や整序といった純粋な文法問題を解くため、というのがありますが、それよりも英文を正確に読むため、という方が大きいです。そして、丸暗記を避け、常に理屈から理解できるよう、また効率よく学べるよう指示します。例えば、no more ~ than…などの構文は結局 no の持つ機能さえ理解していればよく、逆にそうでないと少し形が変わった場合の応用がまったく利かないこと。仮定法現在とはなぜ動詞が原形になるのか、should や were to とはいったい何なのか。関係詞も、関係代名詞の as や関係形容詞の what はちゃんと説明しますが、そんなことよりもまず、関係代名詞の消滅や関係代名詞の what を徹底してやります。自由に使えるよう身に付けさせます。なぜなら、読解や和訳や英作の際に本当に必要となるのはそういったものだからです。これが現実的な学習なのです。

最後に和訳ですが、なぜ和訳か？ それは、和訳をやるといや応なしに「文の構造」を考えさせられるからです。構造を意識して1つ1つの文を正確に読み、理解しなければ、読解力は伸びないのです。適当に読んでいたのでは絶対にダメです。「速読」という言葉をよく聞きます。何か魔法のようなすばらしい方法があるかのように聞こえます。とんでもない風潮です。

どうか勘違いしないでほしい。

読み方なんて1つしかないのです。正確に読むことです。

その積み重ねで力がついてくれば、読むのも自然と速くなる。

それだけのことなのです。

速読の技術論はそのあとの段階です。

受験生（３年生）への本格指導

「単語・文法・和訳」の３本柱の徹底に加え、長文読解を主にやることになります。大学入試の花形はなんといっても長文読解であり、これができないと合格は無理です。

１学期は、内容一致・空所補充・指示語把握・内容説明・要約といった設問形式ごとの解答アプローチを丁寧に教えます。同時に、上述した「論理や言葉のあや」を大切にし、それを身につけた読解ができるレベルまで引き上げていきます。扱う題材はもちろん各大学の過去問ですが、質の良いものだけを厳選してテキストを作成します。設問の要求していることが曖昧だったり、解答が割れそうなものは外します。要するに、やる意義が大きいものだけを、ということです。

なお、授業で最も強調したいのが、思考力の養成です。どういう論理でこの解答に至ったのか、なぜこの比喻がそのような意味になるのか、など、質問をぶつけて積極的にアタマを使わせます。正解への正しいプロセスを自分の頭で実感してほしいのです。そうでないと、どんな場合でも確実に点数が取れるという、確固たる実力はつかないのです。

夏期～２学期にかけては、徹底した問題演習に突入します。国公立大志望の生徒は、記述問題をむさぼるように解くことになります。同時に、この頃から、未知の事項を推測することの大切さを意識させます。試験問題には、知らない単語・熟語・言い回しがいくらかでも出てきます。これは絶対に避けられないことなのです。しかし、知らないからできない、ではつまされないのが入試。そこを乗り越えるためには、「文の構造」や「文脈（論理・言葉のあや）」からなんとか見当をつけ、解答する腕力が必要なのです。そしてその力は一朝一夕につくものではないので、やはり訓練が求められるわけです。

教養の不足、といったことを先に言いましたが、これはもう、様々な内容の文章をたくさん読むしかありません。生徒にはよく、雑に読まないようにと注意します。ideaやmessageがつかめて、実感が湧くくらいじっくり読まなければ、その文章が実際に自分の血となり肉となることはないのです。じっくり読むことは、授業では限界があります。よって、必然的に

個人ごとの復習が大事になります。

難関大合格を目指す生徒に

英語の難関校と呼ばれている大学があります。

国立で言えば、東大・京大・阪大・一橋大・東京外語大。

私立で言えば、慶應(特に SFC)・上智・早稲田・ICU。

こういった大学の入試問題は、センター試験と比べるとやはり大人と子供くらいの差があります。合格するにはそれなりの準備が必要です。

私は、最も大事なのは「質の良い学習」だと考えています。必要最低限の単語や構文は憶えるしかありません。しかし、熟語や文法、訳し方のパターンなどを“丸暗記”する学習は、質の良い学習の対極です。

「深く思考しながら読む」

「効率的なアタマの使い方を知る」

「情報をきれいに整理する」

「論理をつかむ」

「論理を表現する」

「比喻・会話表現に対するカンを磨く」

「単語・熟語の成り立ちを知る」

「take や put などの基本語の機能に敏感になる」

「英語的発想を大事にする」

「解答に至るまでのプロセスを重んじる」

難関大志望者には、このような“上手な学習”を重んじた授業を提供します。

英作文の指導

まず前提として、文法をきちんと理解していることが大事です。ただし、英語の構造的に正しい文が書けるだけでは駄目です。「文の型」や「発想」が大事になるのです。授業ではこれに重きを置きます。言語というものは非常に定式的なもので、普遍的に受け入れられているものしか認められません。例えば、take part inはこの3語で決まり文句です。take the part inでもtake part ofでも良さそうに見えますが、間違いなのです。日本語からの連想でenter a bathとしてもダメで、take a bathと言わなければいけません。つまり、決まり文句は正確に憶えないと使えないというわけです。文の型もそうで、it is ～to…やso ～that…、too ～ to…など、決まった構文を使う必要があります。このことをよく分かっていない生徒が多いのです。自分で勝手に構文を発明してしまったり、日本語の発想をそのまま英語に直してしまったり。「君の顔を見るとうれしくなる」を、I can be happy by seeing your face. と書くのではなく、Your face makes me happy. と書くのが英語なのです。

授業ではまず、英語の型・発想で書かなければいけないのだという事実を十分に認識させ、実際に書けるよう指導します。

英語の型・発想も大事ですが、もう1つ、それに劣らず大事なものがあります。「常にカンタンな英語で書く」ということです。

指導する立場の人間は、このことを念頭に置いておく必要があります。受験生の持つ英語力の範囲内で書けるよう訓練させなければいけません。それなのに、巷の多くの参考書には、「受験生の力では絶対に書けない」ような、非の打ち所のない英文が模範解答として載っています。

これではダメだと思うのです。もっと現実を見据えるべきです。

受験生と同じ視線に立って、どうやってカンタンな英語で書くか、を受験生に考えさせそのように書かせる指導が必要なのです。

もう少し言えば、満点ではなく、7割得点できれば良しとするくらいの気持ちでやらなけれ

ばいけないのです。

受験生が最も嫌う自由英作文

自由英作文で最も求められるのは、論理的な文章を書けるか、ということです。（もちろん、文法的に正しい文を書く。英語の型で書く。）

読解でも大事な“論理”がここでも不可欠なのです。実際に生徒にテーマを与えて書かせると、初めのうちは目を覆いたくなるような出来映えです。

内容はさておき、たいてい文章全体の論理構成がなっていないのです。

具体的に。for example という語句は誰でも知っていますが、それを自分で的確に使うことができる生徒は少ないです。A → for example → B と書いたのはいいが、B が A の具体例として書かれていなかったり、などは日常茶飯事。他にも、最初と最後で自分の意見が違っていたり、内容がテーマとまるっきり外れていたたり…。

日本人はもともと論理に敏感ではないし、学校でもきちんと教えてくれません。だから、意識して使えるよう、訓練しなければいけないのです。

大学時代、Writing を教える慶應大学から来ていた井藤千穂講師（現在 文学博士）という方の授業に出ていました。そこでまず何をやらされたかというと、対比や分類、因果関係といった論理で、一貫性のある英文を組み立てることでした。内容よりも、英語でものを書く「枠組み」を徹底的に身に付けさせられたわけです。「枠組み」がしっかりしていれば、論がぶれることはありません。これは日本語の小論文でも同じです。今思えば、素晴らしい訓練だったと思います。

そういうわけで、授業では最初に論理を整理し、文章の「枠組み」を2～3個教えます。その後は、多少崩すことはあっても、ずっとその「枠組み」で首尾一貫した内容の文章を書く訓練をします。ただし、すぐに書けるようにはなりません。on the other hand や as a result といった「つなぎの語句」の正しい使い方を学び、有効な言い回しを少しずつ吸収し、また

「いじめ・クローン技術・高齢化社会・環境問題」などの時事テーマに対する知識を増やし、それに対する自分なりの意見も言えるようにならなければなりません。

筋の通ったことを英語で書くには、それなりの努力が必要なのです。

受験生へのメッセージ

合格するのに数値が100必要だとすると、私はせいぜい10くらいしか手助けできないと思っています。指導者がそんなことを言うなんて、おかしいことだな、と思いますか？ でも、それが事実です。生徒には時々言います。

「講師はキッカケを与えてやることしかできない」と。

あとは、君たち次第なのです。予備校の授業を活かすも殺すも、君たちの努力にかかっているのです。

だから、授業を、そして講師を最大限に“利用”して下さい。知識を、考え方を、物事の本質を学んで下さい。そして、自分のアタマをしっかり使って、それらを本当に自分のモノとして下さい。

実際の場で役に立つのは、身に沁み付いたものだけだということを忘れないでほしい。うろ覚えの構文を英作文で使ってみなさい。「使い方」が分かっていなくて、必ず間違えるから。＜recognize = 認識する＞というガチガチの対訳だけで記憶している生徒、生きた文章の中では何の役にも立ちませんよ。

マルチナ＝ヒングスという女子テニスプレイヤーを知っていますか？

若干16歳で世界のトップに立った天才ですが、だいぶ前にテレビで見た彼女の逸話は、とても印象的でした。彼女は幼少の頃から、自身もプレイヤーであった母親から英才教育を受けるのですが、ミスをしたり何かできないことがあると必ず母親から言われるのが次のことばです。

「コートに立ったら、誰も助けてくれないのよ」

自分で考え、自分の力でどうにかしなければいけないことの大切さを、幼い我が子に教え込もうとしたのです。

私も、生徒に対する気持ちは同じです。

受験場では、辞書を使うことも、あるいは講師に聞くこともできません。自分の力で英語を読み、解答し、作文を書かなければいけないのです。そのためには、まずは単語を 1500 語くらいは憶えなさい。文法の基本に習熟しなさい。徹底的に、精密に英文を読みなさい。論理や比喻を大切にしなさい。正しいアタマの使い方を知りなさい。すべて、中途半端にではなく、やり切るのです。

授業は厳しいかもしれませんが。時には怒ることもあるでしょう。ですが、それは生徒のことを真剣に考えている証拠だと思って下さい。こじつけめいていますが、喜怒哀楽の「怒」にだけ、心があるのですね。

〔 数学 〕

【数学の学習について】

大学入試は、特に難関校になるほど、ただ単純に公式を知っていて答えを出した、ではありません。またそれが可能な程度の問題はそれほど多くはありません。同様に、解法のパターンを知っていてそれを当てはめる、だけではなかなか解けません。なぜなら、大学は、公式を知っている、解法のパターンを知っている、そしてそれを適度に使える、そういう学生を求めているわけではないからです。ここを間違えていると大きな損失になります。

数学と数学の学習についての問題意識、考え方、方法をここで再検討し、受験に耐えられるものにすることが必要です。そのための場を提供することが最大の目的です。

【若干の注意点】

講座全体は一連の流れになっています。可能な限り全体を受講してください。部分的に受講しても意味はありますが、やはり効果が薄くなる気がします。

問題は一見すると極めて簡単に見えるものも混じっています。実際に答えを出すだけなら簡単だったりします。簡単すぎて、だからどうなの？ と言いたくなるものもあります。それを素材にして授業を行います。

単純に「解いて、解説して」ということが目的ではありません。ですから問題からやる内容をあまり判断しないようにしてください。問題はあくまで素材です。その問題や、その類題が解けるようになるということが講座の目的ではありません。（解けるようにはならないといけなく、それがゴールではありません） ですから「苦手単元の克服」というようなテーマでもありません。そのつもりでもし受講するとしたら、意味はありますが、少し想像と違うな、と思うだろうと思います。

【受験で何が求められるか】

本格的な受験体制に入って、一日の学習時間が平日 5、6 時間、休日 12 時間となり、問題量も一挙に増大しても、だからといって受験に耐えられる数学の力がついてくるとは限りません。受験はやはり相当にハードな学習量をこなさなければいけないけれど、ハードな勉強してもダメな場合もある。これは直視しなくてはならない冷厳な事実です。

自分が志望校（まだ決まっていないなら、高いところに目標を置いてください）に向けて、何をしなければいけないのか。その解答の前に、大学は何を求め、数学の問題を作っているのか。そこをまず考えなくてはならない。

大学は難関大になればなるほど、＜学問＞をするところ、＜研究＞をするところなのです。＜物知り＞は、知らないよりも良いけれど、第一に求められていることではないのです。未知の世界に足を踏み入れていくこと、そのとき要求される発想力と論理的思考力、それらを支える柔軟で強靱な基礎。そういうものを身につけた学生を求めているのです。

大学が要求している力を一般的にまとめるならば、おおよそこういうものだろうと思います。

1 正確な数学的知識

知識といっても覚えている、というのではなく、理解しているのかどうか。その理解の深さが柔軟な思考力となり、イマジネーションの源泉となります。大切なことは、「深さ」であり、「多さ」ではありません。ここは誤解の多いところです。名古屋大学などは「公式集」を入試の時に配ってくれます。つまりは「知っているからといって解けないし、知っているか知らないかをテストしたいのではない」ということです。

2 読解力

問題文と問題の趣旨を正確に捉えること。また定理・公式、基本的な概念、考え方をしっかりと捉えているか。

3 発想力、イマジネーション

通常、数学のセンスといわれているようなことです。特に標準を超える難易度の問題の多くは、この発想力をテストしようとしています。

ただ、この発想力やイマジネーションには大きな誤解がつきまっています。数学の「センス」は天から降ってくるものでも生まれながらに持っているものでもありません。強靱で柔軟な基礎力＝深い知識と鍛えられた論理的思考力の上にはじめて成り立っているのです。センスがないと思っているならば、それはセンスといわれるものを生み出すまでに知識が深くなり、論理的な思考力が鍛えられていないということだと思ったらまず間違いありません。

4 論理的思考力

いくつもの条件が錯綜するような中、そこを突き抜けていくために必要な力です。また同値性、必要条件、十分条件の感覚を磨きあげることができれば豊かな発想力となります。ちょっと後ろの方で説明しようと思います。

5 論理的表現力

自分が考えたこと、分かったことが、自分にしか分からなければ社会的にはそれはゼロに等しい。それは表現され、理解されなくてはなりません。そのためには論理的で他者に理解される表現力を持たなくてはなりません。

入試で必ず、これは解けるでしょう、という問題が1、2問混じっています。その意味は、最後まで解答をさせて、キチンと論理を論理として書き、表現することがで

きるかということのみたからです。

6 計算力

どんなにすばらしい発想力があり、それに形を与える論理力と表現力があっても、数学が数学である限り、その道を最後まで推し進めるための計算力は不可欠です。それはただ腕力で勝負するのではなく（受験の現場では必要にもなるけれど）、先を見通しながら、柔軟に式を立て、さばいていく。その際、同値が保たれているのか崩れているのか、崩れているとすれば、どういう条件をつければ同値性が保たれるのか、そういうことに配慮し、的確に処理しながら式を変形させていく力です。いわば論理的計算力、イマジネーションにあふれた計算力というものがあります。そうしたものが要求されるといいと思います。

7 ついでにいえばパワー、です。

最悪の場合、泥沼のような数値計算を覚悟を決めてやり抜かないといけないこともある。200や300の場合の数なら、方法がわからなければ数え上げてしまう。そういうく馬力も実践的には必要とされます。

【論理力と発想力・イマジネーションの力】

少し具体的に述べましょう。

例えばある問題で、「 a, b, c の少なくとも一つが1に等しいことを証明せよ」と言われたとき、どうしますか？

証明せよといわれても、文章のままでは扱いにくいですね。数式にできればいろいろな加工の仕方ができます。まずは数式にすることを考えると、

- ①「 a, b, c の少なくとも一つが1に等しい」は
- ②「 $a=1$ または $b=1$ または $c=1$ 」と姿を変えます。

ここで1を移行すると

- ③「 $a-1=0$ または $b-1=0$ または $c-1=0$ 」
- ④ならば、 $(a-1)(b-1)(c-1)=0$ となります。

◇ x, y, z の少なくとも一つが0であることと $xyz=0$ は同値だったですね？

①から④のすべてが同値です。

ここで④の左辺を展開すると

- ⑤ $abc-(ab+bc+ca)+(a+b+c)=1$ です。

同値変形してくるだけでまったく見た目の姿が変わってしまいます。①を証明するためには④あるいは⑤のどれかを証明できればいいのです。

何も難しいことはやっていないですよ？けれどまったく違うものが見えてくるのです。

これが論理の力です。同値だと言うだけでここまでやってこられるのです。

そして⑤をみると、3次方程式の解と係数の関係に出てくる式の形が顔を出していますね？ いろんな問題につながっていきそうではないですか？

また最初の証明すべき条件は a, b, c についていわば平等だといえますよね？ですからそれを一つの数式にまとめ上げると④は対称式になっているのです。だから⑤のように基本対称式で表せることができることになります。対称式だと考えると、また別の世界の入り口に立つことができます。

イマジネーションは、こうして広がっていくのです。論理的に展開していき、さまざまに姿が変わっていく、それが同時にイマジネーションの源になるのです。

ちょっと難しいと感じる人もいると思うし、そうではない人もいます。

難しいな、と感じた人も、ちょっと考えて欲しいのですが、よく見ると何も、一つひとつは何も難しいことはやっていませんね？

これは基礎か応用かといえば、基礎なのだと思います。やっていることは文章を式にしたことと、その式の変形だけです。特別なことは何もありません。ただ姿が変わっていくだけで別の世界につながっていく。ここが大切なのです。実は基礎力というのは、あらゆる分野を横断しながら、縦横無尽に数学の世界を動き回ることができる柔軟な力のことなのです。そしてある意味で、この基礎力を作り上げることが一番難しいのです。そのために必要な観点、考え方、とらえ方をこの冬期講習で掴むことができれば、今後の数学の学習は全く違ったものになってくると確信しています。

国語の学習、とくに現代文について

【現代文の学習について】

現代文を不得意にしている生徒が多い。しかし率直に言って、英語や数学に比べて国語、特に現代文は勉強自体があまりやられていないというほかない状態です。定期テスト前に漢字を覚え、授業のノートをざっと見る、というくらいが大半。それでも勉強をしている方かもしれない、という状態です。とにかく定期試験直前以外は完全にゼロという生徒が少なくありません。

そこにはさまざまな理由があると思います。

まずは、現代文の勉強ってどうやっていいのかわからない。

いちおう日本語だからまあ何とかなる。勉強しても仕方ない。

しょせんはセンス。勉強してできるようになるわけではない。

まあそこそこできるし、苦勞しているわけではない（だからやらない。そうはいつでもそこそこできていても、数学や英語なら勉強しているはず。現代文だけはそうならない。不思議なことです。）

勉強されていない理由はこんなところでしょうか？けれども実は、その手前に一つの問題が隠されています。

そもそも国語力、特に現代文の力というものがどういうものなのか、はっきりしていないのです。数学や英語に比べて、その力がどういうものかわからないという生徒が非常に多いのです。正体不明の力はつけようがありませんね？逆にその正体が掴めたならば、学習方法が自ずと明確になってきます。

【現代文の読解について】

現代文の最終的な目的な筆者の主張を正確につかむこと、これに尽きます。このことが問題を解くための必須の条件です。逆に最終的な目的が問題を正確に解くことだとすれば、そのもっとも大切な条件が筆者の主張をつかむことです。

これは当たり前のことですね？

この筆者の主張を正確につかむ力をここでとりあえず＜論理的な読解力＞としておきましょう。ここで次の問題につきあたります。

では、＜論理的な読解力＞とはなんだろうか？

実は国語力がどうも正体不明だということの根っこにあるものが、これなのです。「論理的な読解力ってなんだと思う？」と生徒に質問してみるとかなり曖昧な答えが返ってきます。最大公約数でいえば「筋道を立てて読むこと」くらいです。

ここで先ほどの質問を三つに分けてみます。

一つは「論理的な」とはということなのか？ 筋道とはなんだろうか？ 筋道はどこにあるのだろうか？

二つ目、「読解力」とは何なのか？ あるいは「読む」というのはということなのだろうか？

三つ目、「論理的な」と「読解力」はどのような関係になっているのだろうか、あるいはどちらに軸があるのだろうか？

このあたりになると返ってくる答えがバラバラかつグシャグシャになってきます。逆にいえばここの整理が必要なのです。

別の角度から言えば、書き手がいて、テキスト＝文章があり、読み手がいます。その3つの関係が曖昧だともいえます。書かれたものが、何かを表現し、伝えようとしている。そうである限り、まず文章を書くという行為があり、それが文章である限り従わなくてはならない論理があります。それを文法と言っても良いだろうと思います。そして書かれたものが、一般的な読み手を説得しようとするならば、まず筆者の主張の内容と輪郭がキチンと伝わらなくてはなりません。何を言っているのかわからないのでは主張になりません。同時に、それには根拠がなくてはなりません。そうですね？ 理由のないものを納得しろと言っても無理があります。

であるならば、ある程度までは自ずと仕組み、構造が決まってくるのです。手前勝手に文章を書いたところで意味がないのです。その仕組み・構造を捉えることができればよいわけです。

もう一つ。現代文の力をつけるために絶対に必要なことは語彙力です。

英語と同じです。言葉ですから、言葉自体を知らないのであれば読み込むことは非常に難しい。また同様に背景知識が必要になります。例えば評論文で「近代批判」が非常によく登場します。

このとき「近代ってどういうことかな？」「近代の問題ってなんだろう？」ということについて、全く知識がない状態では読むことができません。

ではこうしたことの解決策は？

問題演習として現代文を読むことが一番近道だと思います。

ただし、読み捨てないこと。問題を解いて、ざっと答え合わせをするだけ、などということにしないこと。自分の思考と筆者の思考を照らし合わせながら解説を読み込み、曖昧だったところ、正解であっても根拠が「なんとなく」だったものをはっきりと問題文に根拠を求めていくこと。この作業をくりかえしていくことが早道だと思います。問題を解くだけでは国語の勉強にはなりません。解いたあとからが勉強なのです。そこから思考の修正が始まるのですから。

現役高校生専門予備校 Veritas

< 講師紹介（一部） >

・ 滝野瀬 昌樹（主任）

東京外国語大学 欧米第二課程 フランス語専攻卒	
担当教科	英語
コメント	質の悪い学習をしている人が多い。 単語や訳し方のパターンを丸暗記。いつまでたっても「基礎」を固めない。完成されていない怪しげな読解法に飛びつく。 日本語の発想から抜け出せない。文章をしみじみと理解しようとしな。解答に至るプロセスを軽視する。etc. etc. みんなには正しいアタマの使い方をおしえよう。 一貫して「良質な」講義を提供します。
07 通年講座	・ 高3 難関国立大合格ゼミ ・ 高3 補講一和訳演習ゼミ ・ 高3 難関私大読解ゼミ ・ 高3 自由英作文添削 ・ 高2 英語特進ゼミ ・ 高2 英語ゼミ

・ 石川 智啓

名古屋大 医学部在学（滝高校出身）	
担当教科	数学・物理・化学 他
コメント	自分に対して甘い生徒がいます。勉強には、これだけやったからよし、という境界線は存在しません。どれだけ勉強したって、しすぎることはないです。表面的なことをなぞったような勉強だけはやめてほしい。そんな勉強なら、やってもやらなくても同じこと。勉強するのならば、とことん深く掘り下げて勉強してほしい。

・ 宇田 幸裕

名古屋大学 工学部在学	
担当教科	数学・物理 他
コメント	一人ひとりに合わせた、丁寧な指導を心掛けています。勉強について、多くの高校生は力を生かしきれていません。 この予備校では、講師が親身になって、勉強方法、時間の使い方、時には生活の仕方までもアドバイスしてくれます。 あなたの持てる力を最大限に発揮し、目標を達成しましょう。

・ 美野 正彰

名古屋大学 農学部在学	
担当教科	生物・化学・数学 他
コメント	生物は骨の折れる暗記科目と思われがちですがそれは間違いです。生命現象を本質的に認識すると、知識の吸収がぐっと楽に、そして面白くなっていきます。一緒に頑張りましょう。 緻密で体系的、かつ知的好奇心をくすぐる授業を展開します。国公立大記述対策も任せて下さい。 最近物理も勉強中です。

・ 杉村 恵

名古屋大学 工学部在学	
担当教科	数学・物理 他
コメント	生徒と共に歩み、一人の人間として向き合える講師でいたいです。勉強はたしかに厳しいものです。だけど、どうせやるなら楽しんでやりましょうね。

・ 石川 哲矢

名古屋大学 法学部在学	
担当教科	日本史 他
コメント	歴史上起こった様々な事件や戦争などの出来事には、必ず全て理由があります。「なぜ起こったのか」と疑問を持つことが大切です。その「なぜ」を、歴史の流れ・因果関係などで、君たちにしっかり納得させます。

	歴史学習の本質を呈示してみせましょう。 ベーシックから難関大論述対策まで幅広く対応します。
--	---

・ 登 祐哉

名古屋大学 医学部在学	
担当教科	英語・数学・物理・化学
コメント	数学や物理などの科目では覚えるべきことは最低限にとどめ、生徒が自分で考えていけるような指導を心がけています。

・ 佐竹 康孝

名古屋大学 法学部在学	
担当教科	数学・英語 他
コメント	勉強するのは、あなたです。 合格するのも、あなたです。 私は、その手伝いを全力でします。

・ 竹内 義将

名古屋大学 理学部在学	
担当教科	数学・化学・現代文 他
コメント	理解することが1番記憶に残る！

他 現在、講師総数、16名

【現役高校生専門予備校 “Veritas” 基本料金表】

(1)基本料金表（この一覧表以外の受講スタイルも可能です。ご相談ください）

	コース	個別指導料	自習料	小計	税込み
3 年生	クラス 1、個別 1	40500	10000	50500	¥53,025
	クラス 1、個別 2	65250	10000	75250	¥79,013
	個別 2 コマ	49500	10000	59500	¥62,475
	個別 1	24750	10000	34750	¥36,488
	追加個別指導	6000			
1, 2 年生	個別 1 × 自習	20250	8000	28250	¥29,663
	個別 2 × 自習	40500	8000	48500	¥50,925
	個別 3 × 自習	60750	8000	68750	¥72,188
	個別 4 × 自習	81000	8000	89000	¥93,450
	追加個別指導	5000			

☆ 別途入会金 30,000 円（税込み 31,500 円）（ただし在籍生からの紹介の場合は免除いたします）

（単位 円）

☆ 請求ならびに支払い方法

月末締めでその月の受講した個別指導・クラス授業のコマ数をカウントしたのち、個々の生徒の方の指導履歴のシートとあわせて請求書を郵送させていただいております。従って上記の料金表はおおよその目安としてお考えお支払いは銀行振り込みでお願いいたします。

☆ なお現在、チケット制への移行を検討しております。移行する場合はコマ数のカウント方法やお支払い方法が変更になります。

(2) テキスト等について

テキストは箇々のケースによって違って参ります。オリジナルのテキストを使用する場合、市販のものの場合、あるいは塾用・教室用の場合がございます。それに応じて変わって参りますが、教室用・塾用の教材を使用する場合は 1 冊 2000 円ほどになりますので、あらかじめご了解ください。

(3)受講の申し込み方法について

- (1) 一週間の個別指導のコマ数。
- (2) 希望の曜日と時間帯（第 1 希望、第 2 希望をご記入ください）
- (3) 指導希望教科
- (4) 以上、3項目は必ずご記入ください。

☆ただし、指導教科以外の教科も必要と判断すれば宿題を出す等を含めて指導いたします。

以下を切り取り、FAXいただくか、Veritas の教室用ブログから申し込みフォームをダウンロードし、メールでお送りください。

Veritas FAX052-222-3887

教室用ブログ <http://veritasnagoya.blog.shinobi.jp/>

アドレス veritas.nagoya@gmail.com

—

高校名	学年	希望曜日と時間帯					
		第一希望					
		第二希望					
志望校							
保護者の方からの要望							
ご住所							
TEL							
mail							

現役高校生専門予備校 Veritas

〒460-0008

名古屋市中区栄2-8-5

土井ビル5F

TEL. (052)-222-3886

FAX. (052)-222-3887

mail: veritas.nagoya@gmail.com

blog: <http://veritasnagoya.blog.shinobi.jp/>

★ 地下鉄鶴舞線・東山線 伏見駅から徒歩5分

★ 「伏見モンブランホテル」の斜向かい

